

解説

附属高等学校 1 年体育

タイトル：生徒はダンスの何を見ているのか-ダンス映像鑑賞の視点-

授業者：丸山実花 教諭

解説タイトル：

作品を解釈する力を育てる

— ダンス鑑賞における創造的思考と省察的思考力の可能性—

コンピテンシー育成開発研究所
特任講師 Claudia Gherghel

本研究は、高校 1 年生 119 名を対象に実施されたダンス映像鑑賞の授業において、生徒が何に注目し、どのような視点で作品を見ているのかを明らかにしようとする試みである。研究では、ダンス経験の有無により生徒の鑑賞視点や記述の語彙の違いに着目しつつ、作品ごとの受け止め方や視点の変化にも注目している。分析の結果、生徒たちは経験の有無にかかわらず「動き」や「構成」など目に見える要素を捉える力を有していたが、作品のテーマや演者の内面に迫るような視点をもつ生徒もいることが示唆された。

ダンス鑑賞という活動は、表層的な「動きの理解」にとどまらず、作品の背後にある意味や感情などを多角的に読み取ろうとする力、すなわち創造的思考力の育成につながる可能性をもつ。**創造的思考力**とは、新しいアイデアを生み出したり、既存の枠組みにとらわれず柔軟に考えたりする力であり、既知の知識や経験をもとに、新たな解釈や表現を導き出す能力である。同時に、鑑賞を通して自らの感じ方や考え方を振り返り、それを言語化する過程は、省察的思考力の育成にも関わる。**省察的思考力**とは、自身の経験や思考を客観的に捉え直し、そこから意味や課題を見出して次の学びへとつなげる力である。本研究では、「怖さ」「怪しさ」など、感情的な言葉で作品を捉える記述がみられ、生徒たちが鑑賞体験を通して自己の感性を起点に意味を構築しようとする試みがうかがえる。さらに、自分がどの視点で見っていたのかを振り返り、他作品との違いを自覚する過程は、自らの鑑賞態度を対象とする省察の働きを促していると考えられる。

また、「ダンスを授業で見る」という目的意識も注目すべき点である。生徒たちは、自身の表現に活かそうとする観点から、「構成」「振付」「テーマ」などに意識を向けていた。こうした視点の転換は、受動的な鑑賞を超え、作品を分析的かつ想像的に捉える姿勢を生み出すとともに、「自分ならどう表現するか」と考える契機ともなり得る。作品を「観る」ことを通じて、「感じ」「考え」「振り返り」「意味づける」過程を支援する本授業の試みは、創造的思考力と省察的思考力の双方を育む実践となっている。